

## ▼新福知山教会を訪問して▼

校長 阿南 孝也

JR福知山駅近くに新たに献堂された、カトリック福知山教会を訪問する機会に恵まれました。昨年12月に教皇フランシスコの呼びかけによって「いつくしみの特別聖年」がスタートしました。バチカンのサンピエトロ寺院への巡礼に代わって、世界の各教区に巡礼指定教会が設けられています。京都は、河原町三条のカテドラル(司教座)教会と福知山教会が指定されました。6月12日(日)午後、ヴィアートル修道会員や信者教職員、また故ブラザーツペンも所属されていた、カトリック混声合唱団の皆様と共に訪問し、祈りを捧げることができました。

福知山教会は、市内の2教会と綾部教会が統合されて、新たに駅前に建てられた教会です。建築家の岩田恵さん(洛星29期卒業生)が設計を担当されました。2014年8月豪雨により、工事中の聖堂が水に浸かるという被害を受けたのだそうです。聖堂と、隣接する幼稚園設計のコンセプトについて、同行下さった岩田さんからお話を伺うことができました。「聖堂屋根の山型の輪郭は、福知山市内から周囲を望む山々をイメージしたものです」。街並みの景観に溶け込んだ建物は、太陽光を取り込んだ設計や間接照明も美しく、聖堂と教会会館がロビーで繋がり、3つの大きなドアを開放すると一つの大きな空間が出来上がる設計がなされていました。

ラバディ神父と共にミサを捧げてくださった京都教区の小立花忠神父は、「ミサによって、目に見えない神の現存を信仰の神秘のうちに体験し、新しい人になって、『行きましょう、主の平和のうちに』と世に派遣されます。退堂の時に見上げると、バラ窓からの光が私たちを勇気づけてくれます」と述べておられます。

教会聖堂後方上部には、「賛美と派遣」というテーマで描かれた「バラ窓」と呼ばれるエッチングガラスが備えられていました。バラ窓とは、主に中世ヨーロッパの教会において、天井近くに明かり取りの目的で設けられたスタンドグラスの一種です。暗い聖堂室内にバラ窓から差し込む光は、神がこの世を照らして下さる希望の光を象徴しており、12世紀の中頃からのゴシック建築の発展とともに、精密で大きなものとなっていきました。

ミサは、イエス・キリストが定められた最後の晚餐を、2千年間繰り返し再現している、カトリック教会が最も大切にしている祈りです。ミサの終わりに派遣の祝福をいただき、司祭が「行きましょう、主の平和のうちに(ラテン語で“Ite, missa est.”)」と唱えます。missa(ミサ)は、ラテン語で「派遣」を意味する missio(ミッシオ)に由来すると言われます。

神の愛ゆえに、神にかたどって創造された一人一人すべての人は、命をいただいたと同時に、ミッションすなわち「使命」という命をいただき、この世に派遣されていると信じています。私たちの社会は、地球環境の保全、エネルギーの確保、紛争・難民問題、経済格差など、解決の困難な課題を抱えています。地域のつながりが希薄となり、孤独に苦しむ人が大勢おられます。イエス・キリストは弟子たちを宣教に派遣するとき、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」(マタイによる福音書28章10節)と約束されました。このイエスの言葉は、現代を生きる私たちにとっても真実であり、大きな励ましです。

洛星で学ぶ生徒たちが、イエス・キリストがいつも共にいて下さることを忘れることなく、与えられた場所で、与えられたミッションを果たしてほしい、そう願っています。

—前期中間考査を終えて—

定期考査は、結果が出た後の対応が大切です。授業や家庭学習に問題がなかったかどうか振り返り、改善を図ってください。点数にだけ目を向けるのではなく、学校生活、家庭生活全体に目を向けて、反省の機会として生かしてくれることを願っています。